

# 育む

飯田の舞台芸術を、未来へつなぐために。

～担い手14名の対話の記録～



飯田文化会館では、伝統芸能・演劇・音楽・ダンスなど、多くのジャンルの団体の方が、「育む」をテーマに日頃の活動や経験から感じていることを共有し合い、舞台芸術の未来をともに考えました。

# 開催データ・館長挨拶要旨

令和7年度 舞台芸術担い手意見交換会 開催レポート

## 開催データ

- ▶ 日時 2026年  
第1回 1月29日（木） / 第2回 2月9日（月）  
各回19:00～20:30
- ▶ 会場  
飯田文化会館
- ▶ 参加者  
舞台芸術の担い手 計14名（情報誌『toi toi toi!』掲載者）
- ▶ 手法  
2グループでのフリーディスカッション、および全体発表
- ▶ 参加団体（ジャンル）※順不同
  - ・おいでなんしょ寄席実行委員会（落語）
  - ・演劇宿（演劇）
  - ・萩元晴彦ホームタウンコンサート実行委員会（音楽）
  - ・大鹿歌舞伎保存会（歌舞伎）
  - ・今田人形座（人形浄瑠璃）
  - ・飯田交響楽団（音楽）
  - ・飯田文化協会（多ジャンル）
  - ・NPO法人いいだ人形劇センター（人形劇）
  - ・南信州アートラボ（演劇ほか）
  - ・他 元プロダンサー など



グループA



グループB



筒井文彦 飯田文化会館館長

## 飯田文化会館館長 挨拶の要旨

リニア関連工事や建設費の高騰などを背景に、新しい文化会館のこれからについて新しい局面を迎えている。一方、現文化会館は、大ホールの空調故障など深刻な不具合が発生している。他自治体で見られるような「老朽化による長期休館」を防ぎ、市民の文化活動を止めないため、まずは現文化会館を改修し、最大20年間の長寿命化を図る。今後、段階的に整備する計画の、小・中・大ホールについては長期的に検討していくこととなるが、その期間においても文化芸術活動を充実させ、若い世代へ引き継いでいく「育成」が不可欠である。担い手の皆様から率直な意見や知恵をお借りしたい。

## 課題

多くの団体が活動30～50年を迎え、担い手の高齢化と若年層の参加者減少により、存続についての危機感が高まっている。

具体的には、学校教育における芸術の鑑賞や体験をする機会の減少に伴い、次世代へ舞台芸術の魅力が伝わりづらくなっているという危惧や、工房や練習場所の不足、主に運営に関する個人への負担、趣味・娯楽の多様化や鑑賞マナーの低下など、舞台芸術を育む土壌がハード・ソフト両面で多くの課題を抱えている状況にあるとの意見が出された。

## 解決に向けて

担い手の「熱狂」を起点に、練習風景の公開などで「楽しむ姿」を可視化し、外部の関心をひきつけることが重要。

ジャンルを超えたコラボレーションといった「横」の連携によって観客層を共有し、飯田が誇る「聴衆力」を資産として生かしつつ、「高校生による高校生のための大文化祭」や、保育園や小中学校等への「出前公演」など、舞台芸術を次世代につなぐ具体的なアクションも提案された。

## 「人」の不足による活動の縮小

- ・多くの団体が活動30年～50年の節目を迎えている中、設立当初の熱量を知るメンバーが高齢化する一方で、そのバトンを受け取る20代・30代が不足しており、ジャンルによっては活動の維持が不可能になりつつある。

## 人形浄瑠璃：上演体制の危機

- ・人形浄瑠璃は、人形1体を動かすのに「主遣い・左遣い・足遣い」の3人が必要。舞台上に3体の人形を出すなら、最低9人の演者を確保しなければならない。しかし現在、人が減ってしまい、9人を揃えるのがギリギリの綱渡り状態。人数が足りないため、昔やっていたような時代物の大きな演目ができなくなった。活動形態を縮小せざるを得ないのが現状。
- ・地元中学校の人形劇クラブが、少子化や働き方改革の影響で休止・地域移行となり、若い世代が体験・参加する機会が減ってしまった。今いる若手もクラブ出身者が多いため、このルートが消えると将来的に誰も入ってこなくなる恐怖がある。

## オーケストラ：新陳代謝の鈍化

- ・飯田交響楽団は設立30年を超えているが、50名ほどいた団員が現在は30名ほどに減少。この10年ほどメンバーの変動が少なく、平均年齢がそのまま10歳ほど上がった。
- ・弦楽器（バイオリン等）は、市内高校の弦楽班などがあるものの、卒業して大学へ行くと地元に戻ってこない。必要な人数を確保できず、少ない人数で回しているパートもある。
- ・この地域の吹奏楽人口は多いものの、オーケストラとは管楽器の扱いが異なるため、なかなか入団につながらない。転勤族が支えていたこともあったが減っている。

## 演劇・ダンス：中間層の空洞化

- ・30年間指導してくれた絶対的な代表が亡くなった後、残された大人10名ほどで何とか細々と活動を維持している。求心力をどう維持するかが課題。
- ・一番動けるはずの20代・30代が、進学や就職、結婚を機に活動を離れてしまい、ごっそりと抜けている。残っているのは40代以上のベテランばかりで、次の世代が見えない。
- ・ダンスでも、人気ジャンルは民間のスクールに若い世代が集中している。

## 教育現場の変化

- ・昔は学校に、熱意を持って生徒を牽引する「名物先生」のような顧問がいっぱいて、演劇や合唱が盛んだった。しかし今は、少子化や教員の働き方改革の影響で、部活動が縮小・地域移行している。
- ・子どもたちが日常の中で生の文化に触れ、入り口に立つ機会が少ない。
- ・合唱も、かつては一番手軽な文化活動だったが、今は少年少女合唱団も休止している。学校教育の中で「みんなで歌う」という体験が減っているのかもしれない。
- ・学校での芸術鑑賞会も減っている。生のオーケストラの音圧や、演劇の役者の息遣いを知らないまま大人になっている可能性がある。体験したことがなければ、選択肢にすら挙がらない。
- ・ネットやスマートフォンでどんな娯楽でも手に入る時代だからこそ、自ら時間やお金を使って「生の舞台」を観に行こうとする意欲が育ちにくいように感じる。

### 「創る場所」がない（人形劇・演劇）

- ・人形劇には、上演するホールだけでなく、人形を作ったり直したり、メンバーが集まって作業するアトリエや工作室が必要。そうした拠点がなかったり活用できたりしておらず、課題となっている。
- ・演劇も同様に、大道具を作ったり保管したりする場所がない。練習場所と製作場所がバラバラで、移動や作業の負担になっている。

### 身体表現の活動場所（ダンス）

- ・飯田文化会館で練習すると床が硬すぎて、ダンスの練習をすると膝や腰を痛めてしまう。リノリウムなどの専用床があるといい。
- ・備え付けの鏡が十分ではない。結局、高い使用料を払って民間のスタジオを借りざるを得ず、活動資金を圧迫している。身体表現に適した公的な練習環境が飯田にはない。

### 予約競争の疲弊

- ・専用の練習場や定期的な利用枠の確保に苦労している。

### 持ち出しによる「出前公演」の限界

- ・学校での鑑賞会が減る中、少しでも生の舞台を届けようと、メンバーが仕事を休んで保育園へ出前公演に行っている。しかし、機材費や照明費などを合わせると1回10万円近い持ち出しになる。勤め人ばかりのアマチュア劇団が、ボランティア精神で続けるには、金銭的にも時間的にも限界が近づいている。行政からの支援があるといい。

### 鑑賞マナーの崩壊

- ・バレエの公演中に、撮影禁止であるにもかかわらず、隠れてスマートフォンで動画を撮影する観客が見受けられた。おそらく我が子の姿を撮影していると思われるが、マナー違反があると、演者や他の観客も集中できないことがある。同じ空間を共有して楽しむ観客としての質が、一部で変わってきていると感じる。

### 「生」への無関心と競争

- ・ネットで世界中の一流のパフォーマンスが無料で見られる時代に、わざわざ地元のホールに足を運んでもらうハードルは年々上がっている。生でしか味わえない価値をどう伝えるか、伝え方に苦心している。

### 「横の交流」の減少

- ・コロナ禍以降、伊那谷文化芸術祭の打ち上げへの参加団体が減少するなど、ほかの団体と交流をする機会が減っている。情報交換や助け合いが生まれづらい。

「熱狂」こそが最大の求心力

「すべての新しいこと、美しいことは、一人の熱狂から始まる」。一人が熱狂して楽しんでいけば、そこに共感する人が集り、世代間のギャップを越え、やがて多様な人を巻き込む大きなうねりになっていくはず。今の時代、組織を維持しようと無理に人を集めるよりも、今いるメンバーがいかにか熱狂し、活動自体を心から楽しむかにフォーカスする方が、結果的に次世代をきひきつける力になるのでは。

イメージを覆す「大人の遊び場」の演出

いい大人形劇フェスタで企画された「夜のシークレットライブ」は、お酒を飲みながら大人向けの人形劇を楽しむというもので、好評だった。人形劇といえば子ども向け、という固定観念から脱却してくれた。「大人が本気で楽しむ」姿を見せることは、文化の敷居を下げ、新たな関心層をひきつける。真面目な顔をして文化を継承するだけでなく、遊びやゆとりのある場から、新しいつながりや活動の輪が広がっていくのでは。

求められる「発信力」

海外での日本アニメ人気に比べて、伝統芸能の認知度が低い。TikTokなど若者が日常的に見るSNSを活用して発信していくべき。担い手の多くがSNSに苦手意識を持っているため、得意な人材（若手など）に任せたい。

1ターンで移住した際、公演や活動の情報にアクセスできなかった、広域の情報にアクセスできる情報誌があればよかった。

帰りのバスで起きた「熱の伝播」

大鹿歌舞伎の公演を終えた帰りのバスの中で、ある30代の若手メンバーが、先輩後輩がいる中、酔った勢いで本音をぶつけた。「もっと上手になりたいんです。人によって教え方ややり方が違う。どれを正しい型として後世に伝えるべきか悩んでいる」。これがきっかけとなり、今では若手が主導して、過去の名優のVHSなどを引っ張り出して見直す定期的な勉強会が始まった。

やらされる練習ではなく「自分たちがうまくなりたい、正しく継ぎたい」と思ってやる練習は熱量が全く違う。グループの空気が一変し、新たな流れが生まれつつある。

常に「新しい客層」を探索

落語会では、時代に合わせて「目玉」を作り、常に若い客層を取り込もうとしている。当然、観客も年配の人はいなくなっていくわけで、若い人を呼ばなければ成立しない。新しいお客さんを獲得するにはどうしようか、常に考えている、時代の変化に合わせて落語家も変わっていくのだから、我々も興味を持つ若い人を少しでも多く集めるために変わっていかなければならない。

出向いて届ける「本物のすごさ」

保育園で生の劇を見せた際、普段はじっとしていられない子が、照明と音響、役者の息遣いに圧倒されて40分間見入っていた。学校に来てもらうのを待つのではなく、こちらから出向いていく活動を地域全体でサポートする仕組みが必要。

「熱狂」を中心とした舞台芸術の渦（グループAの発表より）



グループAでは、「体験」「交流」「伝統」など、舞台芸術を未来へつなぐために欠かせないさまざまな要素が出された。図の中心には「熱狂」が据えられており、「一人の熱狂」から始まり、渦のように広がりを見せていくことが重要だということを示している。「熱狂」というキーワードは、飯田市出身のテレビプロデューサー・萩元晴彦氏が残した言葉「すべての新しいこと、美しいことは、一人の熱狂から始まる」に由来している。

この渦を地域全体へ波及させるために「文化的なコラボレーション」も提案された。例えば、歌舞伎の後にクラシックコンサートが始まるといった、ポップで意外性のある組み合わせを積極的に行うことで、単独の団体では限界がある課題に対し、熱狂を軸にした「仕組み」と「交流」によって解決を図るといったもの。

## コラボレーションによる「観客の共有」

例えば、歌舞伎の演目の後にクラシックコンサートを組み合わせる。あるいは人形劇の合間にダンスが入り込む。そんな、一見するとミスマッチな「ジャンルをごちゃ混ぜにしたポップな仕掛け」をもっと増やすべき。ジャンルを横断させる最大のメリットは、各団体が持っている固定客（例えばオケのファンと人形劇のファン）を共有し合えること。お互いのお客さんを共有することで、地域全体の文化芸術ファンの裾野を広げることができる。

## 「横のつながり」の仕組み化への渴望

今回のように、普段は決して交わらない他ジャンルの人間が集まり、顔を合わせて本音を語る機会自体が極めて稀で、有意義だった。これを一過性の場にせず、日常的にお互いの公演を宣伝し合ったり、集客や運営のノウハウ（例えば、長年ファンを離さない「おいでなんしょ寄席」の地道なアンケート活用など）を学び合ったり支え合ったりできる「定期的なネットワーク」となるといい。

## 飯田の「聴衆力」への自信

課題ばかりに目を向けるのではなく、飯田が持つ「プロから認められた強み」を再定義する声も。落語の人間国宝クラスの噺家や、プロのオーケストラ奏者などが「飯田の聴衆はレベルが高く、自分たちの力量を引き出してくれる」と絶賛するなど、演者を乗せる「観客の力」は地域の大きな財産。生の舞台でしか味わえない空気感や非日常感を共有する喜びを、子どもたちを含めた多くの人に提供し続けることが重要。目が肥えていて、演者を本気にさせる聴衆がいる。これは一朝一夕には作れない、お座敷文化や芝居小屋の歴史が育んだ飯田最大の誇り。

## 高校生主体の「大文化祭」の開催

行政主導で、高校生たちが企画・制作・運営・出演する「高校生大文化祭」を毎年開催してはどうか。文化会館という大きな舞台で、照明を浴びて喝采を受けるという強烈な「成功体験」があれば、彼らは大人になって一度地元を離れても、いつか飯田の文化シーンに戻ってくるのではないかと。運営については数年をかけて高校生主体に移行していく。

## プロフェッショナルによる「刺激」の投入

プロから直接指導を受ける機会（ワークショップなど）は、参加者の技術だけでなく、意識や目の色を劇的に変える。行政には、こうした「プロと市民が触れ合う機会」への重点的な支援も求めたい。

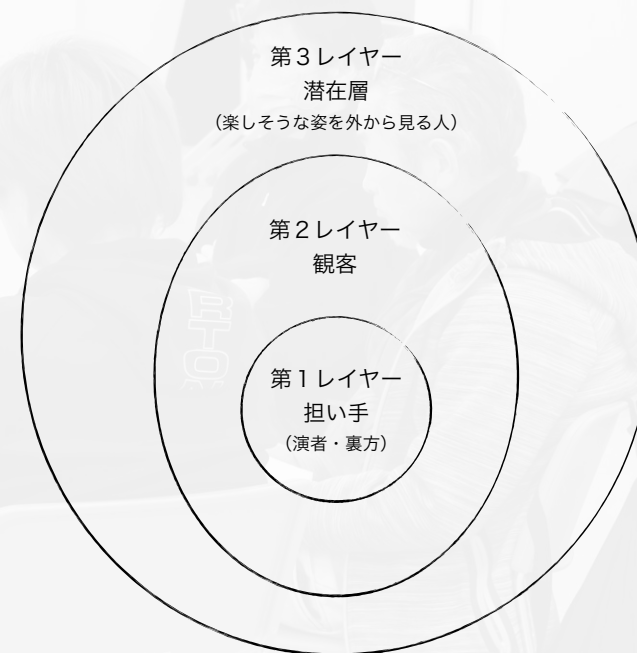
## 持続的に活動できる「創る・育つ場所」の確保

人形や大道具を継続的に制作・保管できる工作室の開放や、ダンス練習室など、担い手が継続して創作・練習に打ち込める環境があれば活動の幅は広がる。

## 活動の「ガラス張り（スケルトン）化」

閉じた空間で稽古や上演をしているだけでは、社会に対して存在していないのと同じ。演じる人、それを観る人だけでなく、「その楽しそうにしている様子を、さらに外側から見ている人（第3レイヤー 右図参照）」を作るといい。例えば、練習場をガラス張りにしたり、公共施設のオープンスペースや路上など人目につく場所でワークショップや活動を見せたりする。外を歩く人が「何をやっているんだろう？ なんだか楽しそうだな」と自然に足を止め、のぞき込めるようなオープンな環境づくりが、新たな担い手や観客を育む最初の「きっかけ」になる。

「潜在層（第3レイヤー）」の可視化（グループBの発表より）



特に注目したのは、図に描かれた「第3のレイヤー・潜在層」である。従来の舞台芸術は「演じる人（演者・裏方）」と「観る人（観客）」という2層の関係で語られることが多かったが、グループBは、その外側に「楽しそうに見ている観客（や演者）」を、さらに外から見ている人」という新たな層を設定した。

この潜在的な層に対し、活動の楽しさを視覚的に伝えることが最大の「きっかけ」になると指摘している。具体的なアイデアとして、練習場所や会議室を「スケルトン（ガラス張り）」にすることが提案された。外を歩く人が、中で行われている活動や、それを楽しんでいる人々の姿を自然に目にすることで、「何をやっているんだろう」という興味を抱かせる仕掛けである。



今回の180分に及ぶ対話を通じて明らかになったことは、活動を「育む」ためには、ハコ（施設）を維持するだけでは不十分だということです。「一人の熱狂から始めること」「楽しむ姿をオープンに見せること」「ジャンルを越えて混ざり合うこと」担い手たちから出たこれらのアイデアは、市民と行政が協働して取り組む道標です。

この場を単なる「意見聴取」で終わらせず、皆様から出た知恵と熱意を具体的な形にしていくため、今後も継続的に対話の場を設け、飯田の舞台芸術とともに「創り、育んでいく」ことを約束し、会は締めくくられました。

令和7年度 舞台芸術担い手意見交換会 開催レポート

作成日 : 2026年3月  
 編集・制作 : 舞台芸術担い手意見交換会運営チーム  
 お問い合わせ : 飯田文化会館 TEL: 0265-23-3552